

要介護高齢者の口腔状況調査（全国調査）

地域医療対策部

【背景と目的】2025年に訪れる超高齢社会に象徴されるように、日本における高齢化は加速している。その中で、地域包括ケアシステムの構築が進み、これまで病院や施設で療養していた高齢者が地域に戻り、訪問歯科医療、高齢者歯科医療の需要も高まるであろう。

かつては、残存歯が少ないことから総義歯の調整等が訪問歯科診療への要望の中心であったが、歯科医療技術の向上や8020運動などによる国民の意識の高まりから高齢者の残存歯は増加し、口腔内状況の変化、食べる事への関心の高まりなどから、歯科医療は歯の形態の回復から口腔機能の回復に移行するとされている。

たしかに、高齢者の口腔内状況は変化し、求められている歯科医療も変化している。しかし、高齢者の残存歯の増加に伴い、う蝕や歯周病は多発傾向にあると想像できる。さらに、要介護高齢者となれば、複数の疾病を抱えていることが考えられ、歯科固有の処置のリスクは高くなるといえる。これからの歯科医療は、口腔機能の維持・回復と共に、歯の形態の維持・回復、最期まで食べられるよう、口腔環境を整えることが求められると考える。現在の診療報酬は、高齢者歯科医療、訪問歯科医療に対する評価が十分とは言えず、改善が求められる。

そこで、口腔内状況の実態調査を行い、課題の整理と、要介護高齢者の増加に対応した歯科医療が提供できるよう、高齢者歯科医療の改善に向け、取組みを行うことを目的として実施した。

【調査方法】

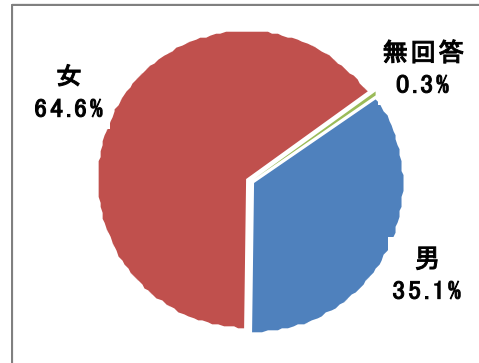
- ・調査期間：平成27年1月から8月
- ・調査対象者：上記期間で直近に訪問診療を行った初診または再初診の人（65歳以上）
1協会5人の訪問診療実施役員に調査を依頼（1人あたり10人記載）
（47協会×5人×10人＝2350人）
- ・調査方法 カルテより初診・再初診時の状態を調査用紙に記載し返信封筒で保団連に送付。
667人分の回答があった。
- ・回収率 $667/2350=28.4\%$

【調査結果】

1、基本属性

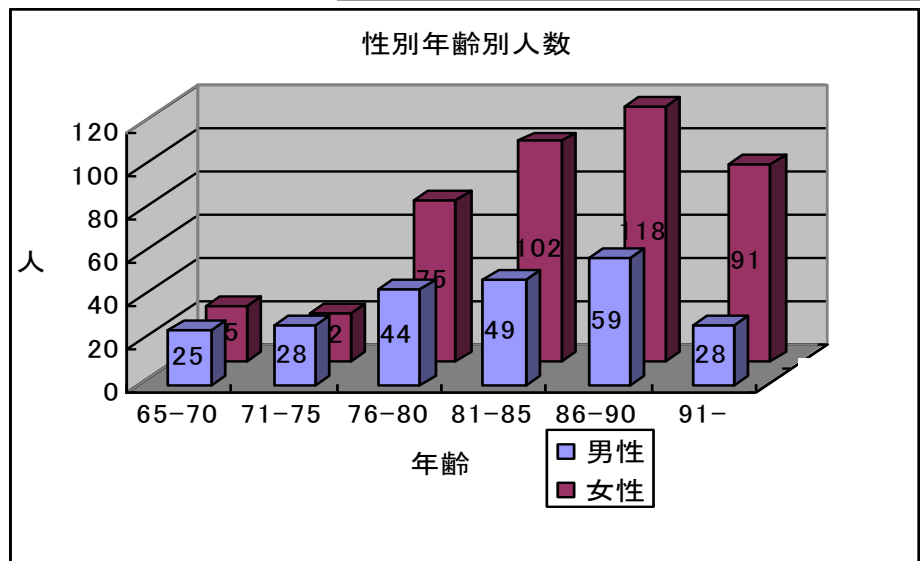
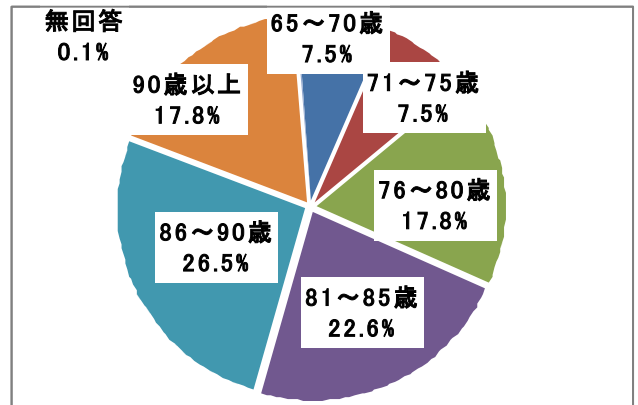
① 性別

男性 234 人 女性 431 人 (1 : 1.84) 無回答 2 人



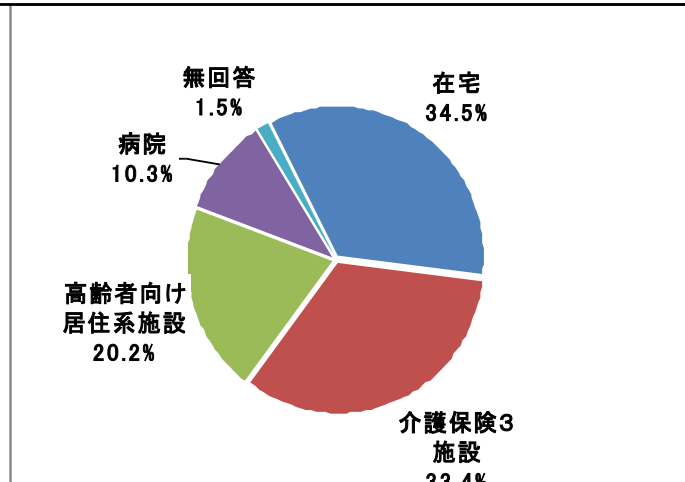
② 年齢別

70 歳代が 25.3% 80 歳代が 49.1% 90 歳以上が 17.8% 最高齢者は 103 歳 平均年齢 83.6 歳
70 歳代後半からは女性が多くなっている。
男女とも 80 歳代後半が最も多い



③ 居住先

在宅 34.5% 介護保険 3 施設 33.4% 居宅系施設 20.2% とこの 3 つの場所が居宅先として多い

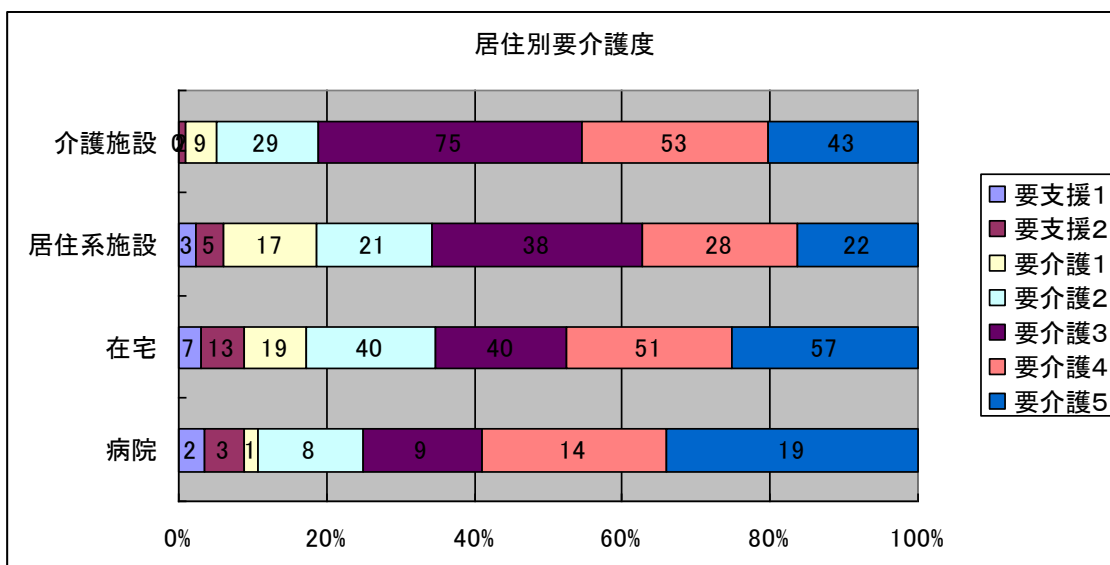
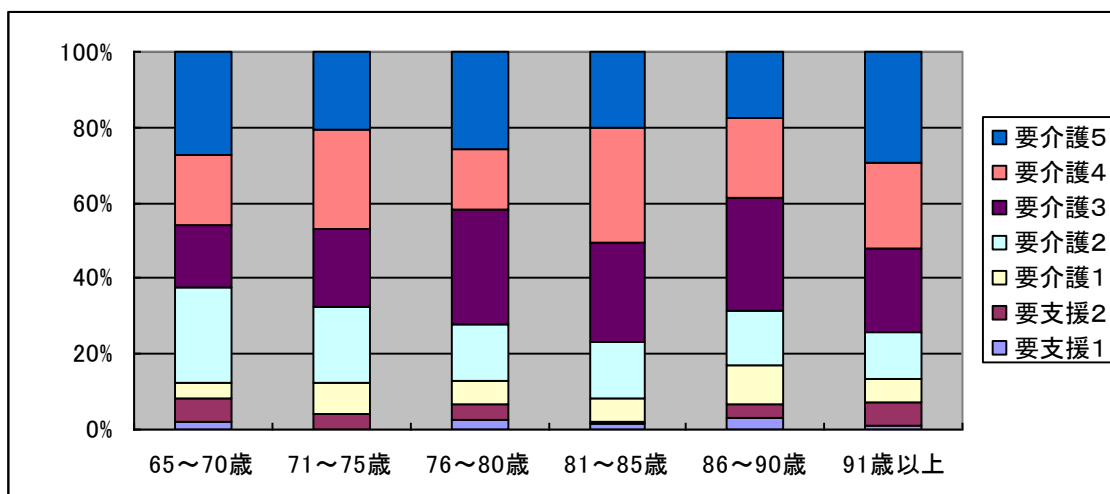
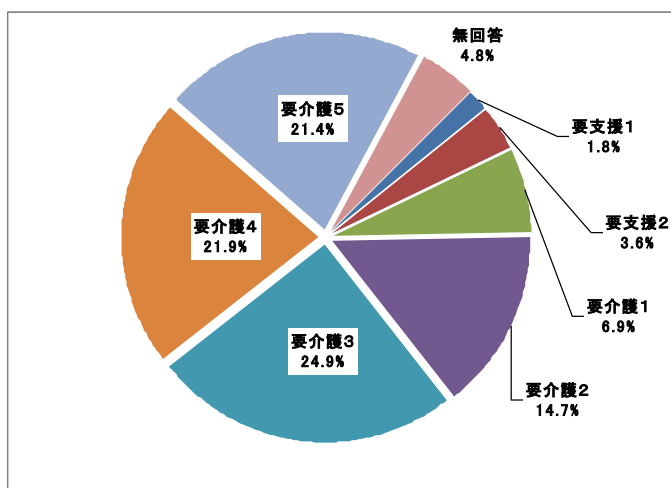


④ 要支援・要介護度

要介護3が最も多く24.9%要介護4が21.9%要介護5が21.4%と続き、これらで7割弱を占める。

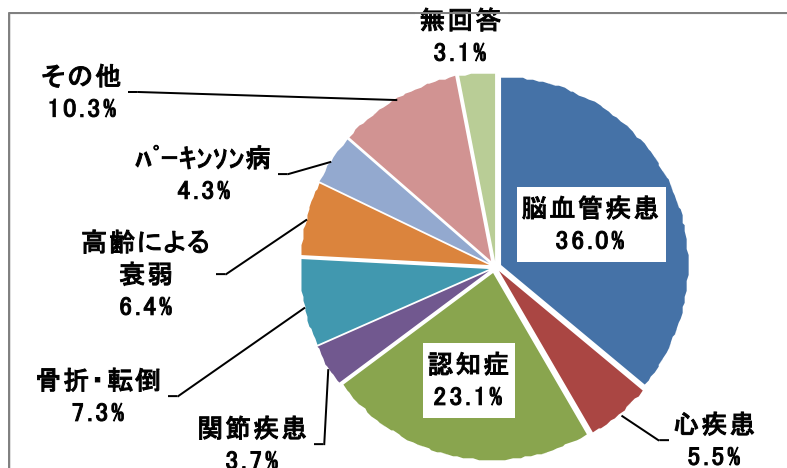
年齢別では高齢になるにしたがって重症化するという傾向にはなかった。

居住別では介護保険施設と病院で介護度が高い傾向にある。



⑤ 主疾患

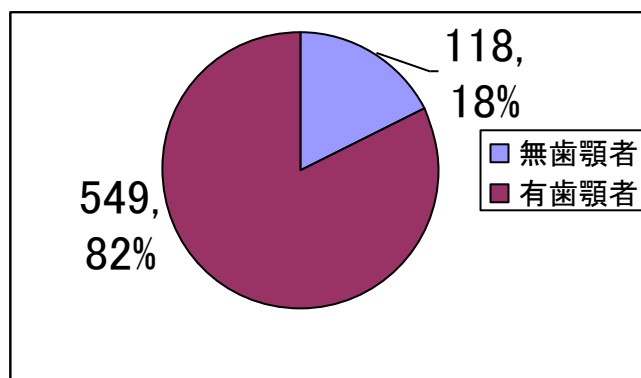
脳血管疾患が 36.0%認知症が 23.1%と多くこれらで約 6 割を占めている。認知症患者が増加している傾向にある。整形外科疾患が 11%（骨折・転倒・関節疾患）だった。



2、歯の状態

① 有歯顎者の割合

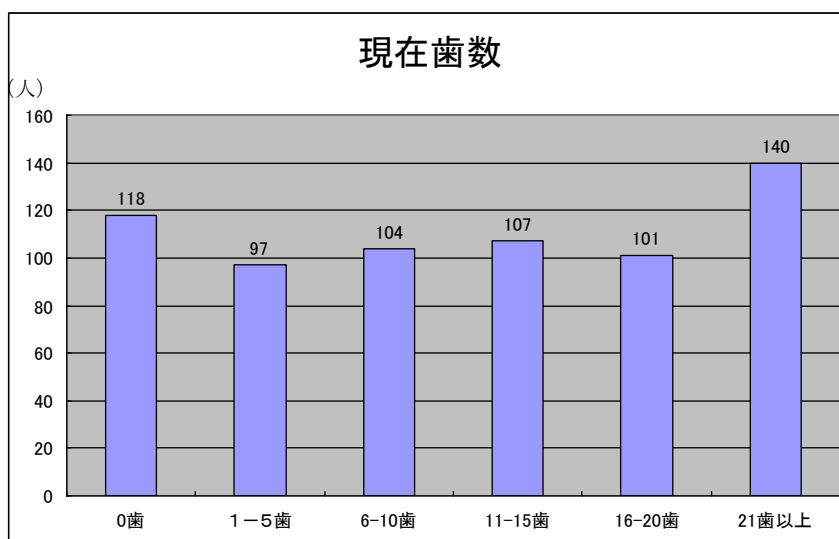
有歯顎者は 82%、無歯顎者は 18%と有歯顎者が圧倒的に多い。



② 現在歯数

21 歯以上が最も多くこのデータからも多くの歯が残存している人が多いことがわかる。平均現在歯数 12.35 本であった。

(有歯顎者では 14.59 本)

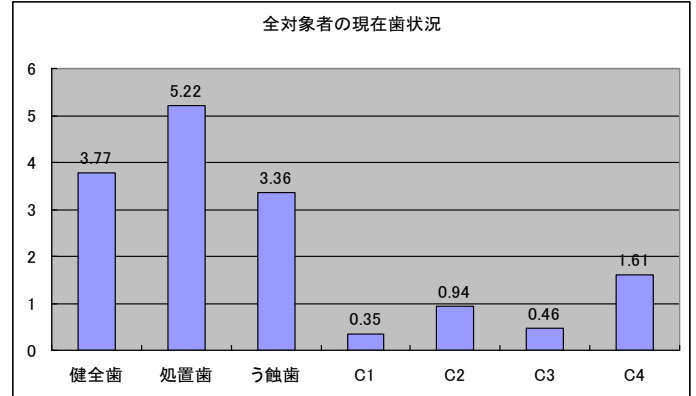
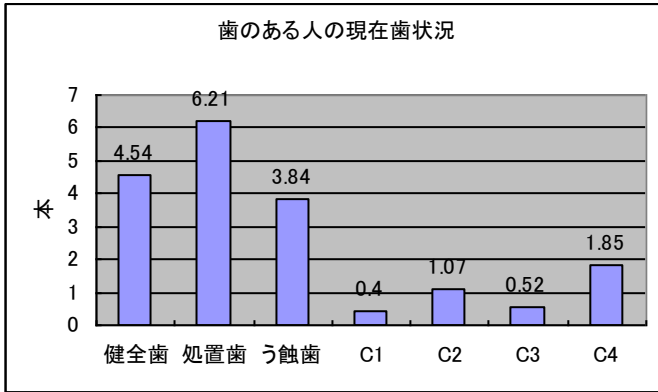


③ う蝕状況

有歯顎者では1人平均健全歯数は4.54本、処置歯は6.21本と比較的多い。C4は1人平均1.85本であった。未処置歯が合計3.84本であった。

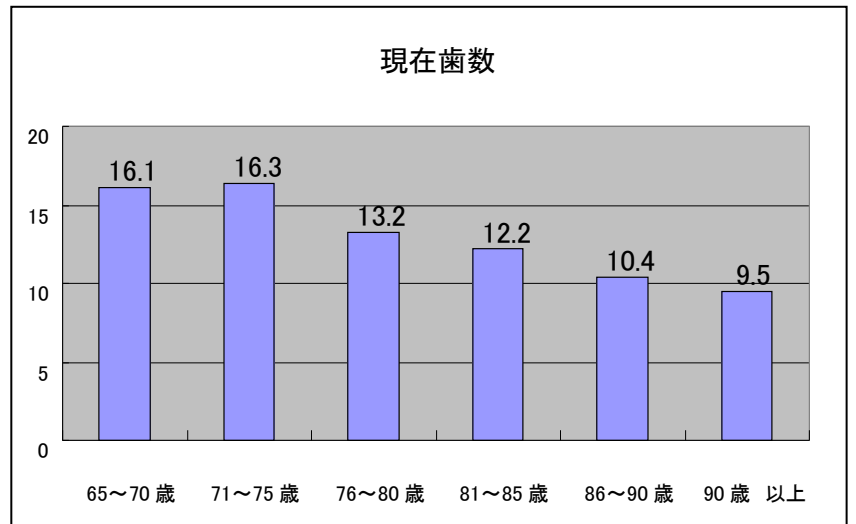
全対象者では1人平均健全歯数は3.77本処置歯は5.22本と比較的多い。C4は1人平均1.61本であった。未処置歯が合計3.36本であった。

667人中C1保有者80人C2保有者172人C3保有者123人C4保有者283人であった。

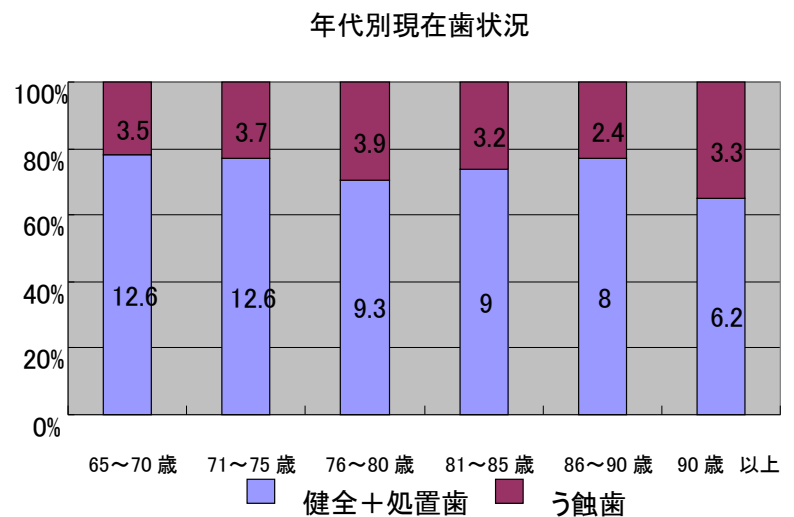


④ 年代別現在歯状況

年齢が進むに比例し現在歯が少なくなる。しかし80歳代前半でも12.2本あり、90歳以上でも9.5本残存している。

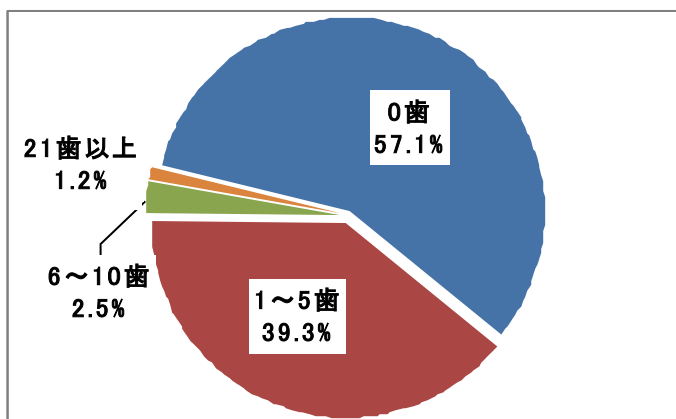


う蝕の割合は年齢別ではあまり差はなかった。



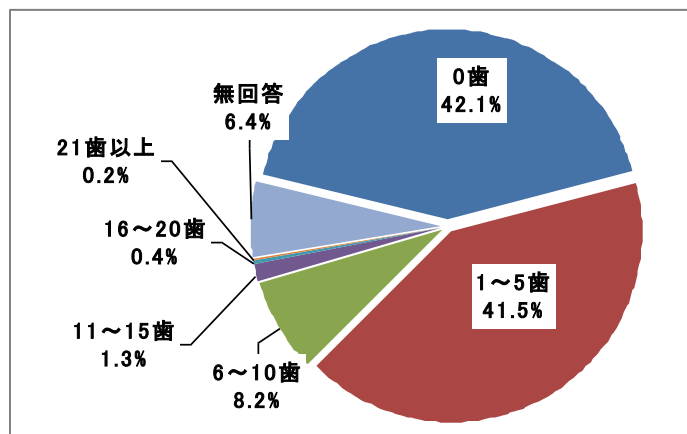
⑤ 根面う蝕

C2 保有者 172 人中、根面う蝕がある者は 70 人であった。根面う蝕の本数は約 4 割が 1-5 本あり、21 本以上ある人も 2 人いた。



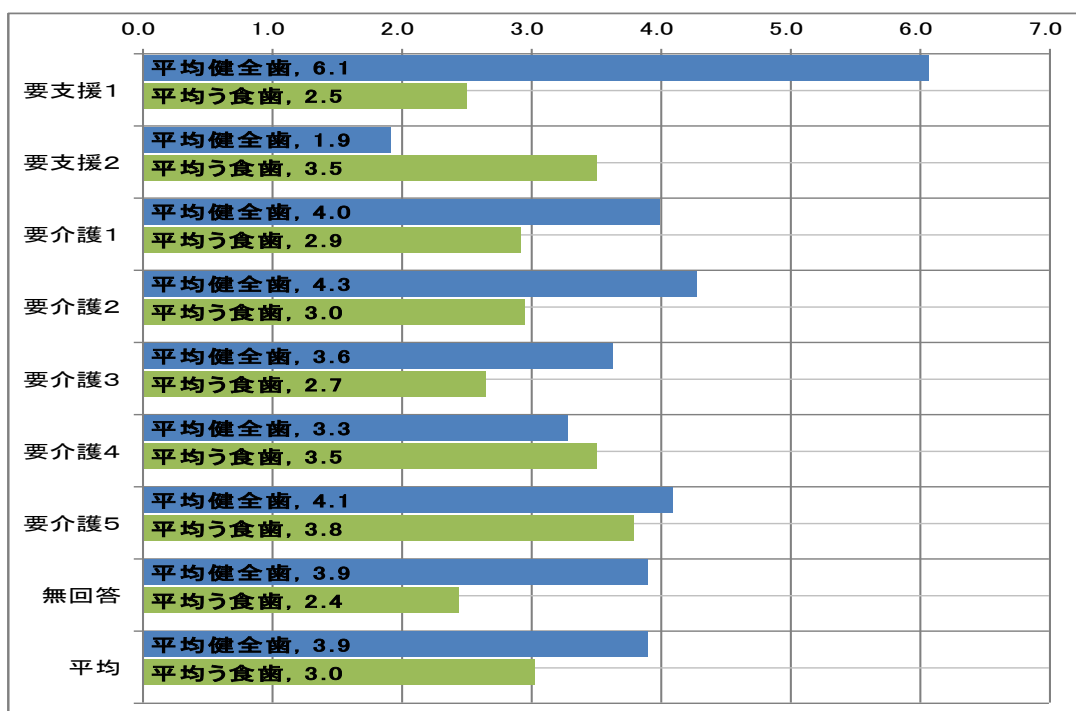
⑥ 残根の状況

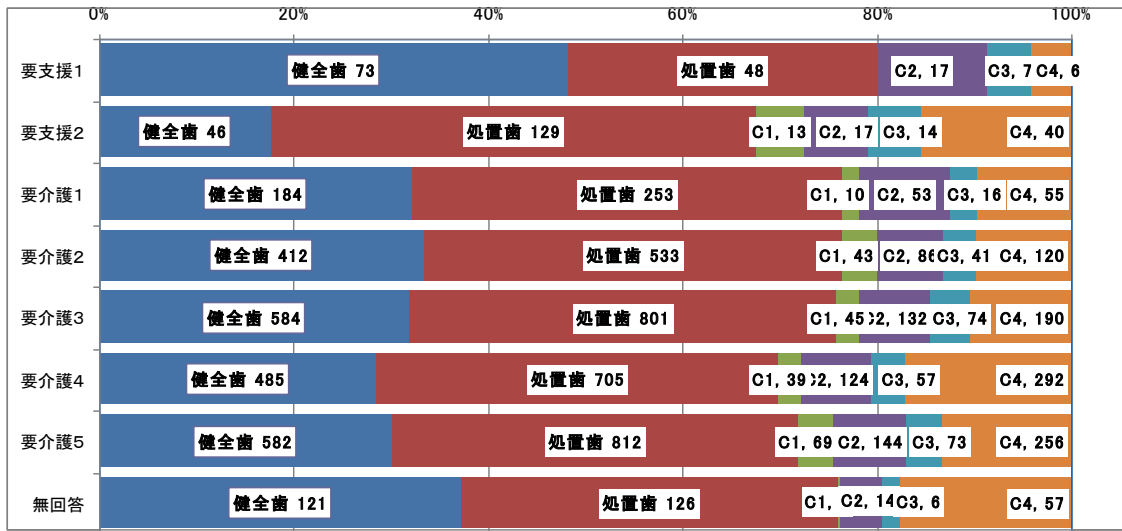
残根は 1 人平均 1.61 本である。有歯顎者では 1.85 本 0-5 歯が 83.6%を占めた。残根は 283 人にあり有歯顎者の 51.5%に認められた。



⑦ 要介護度別健全歯数とう蝕数

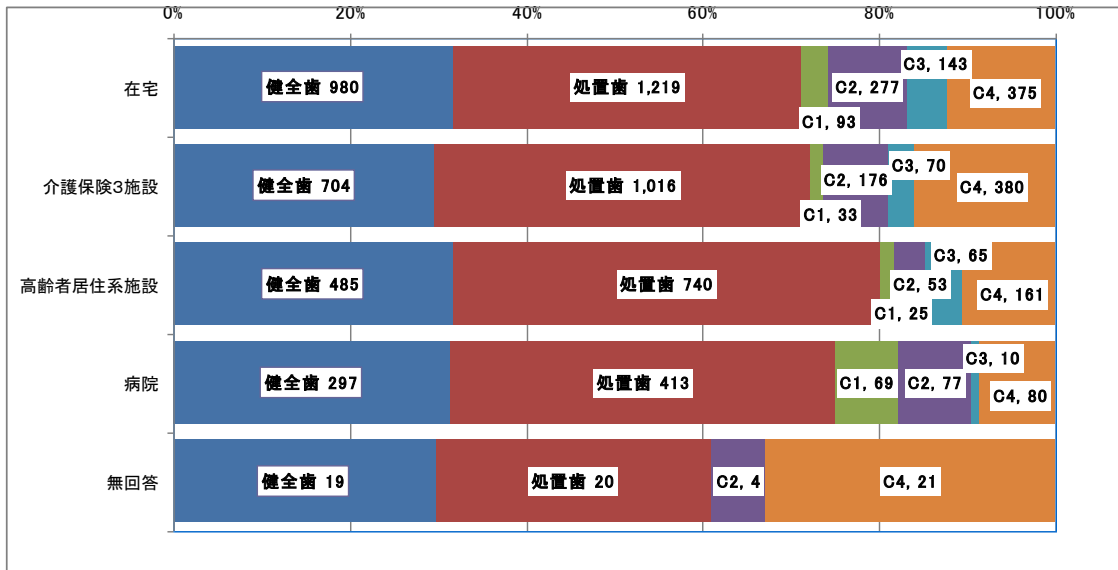
要支援 1 では健全歯が多い。要介護度が高くなるにしたがって、う蝕が多くなるとは言えない。





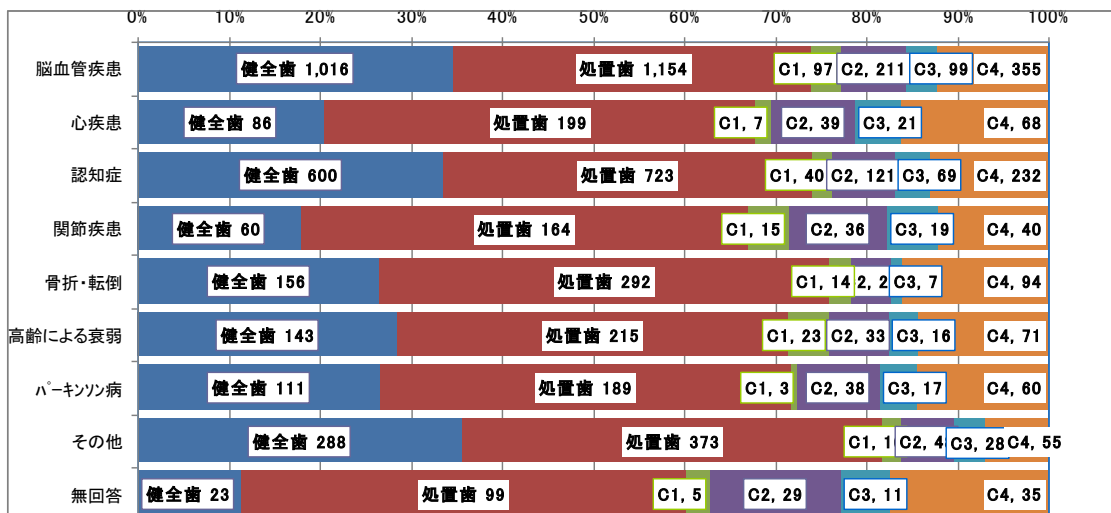
⑧ 居住別の現在歯の状況

大きな違いは認められなかったが、高齢者居住系施設でやや未処置歯が少なかった。



⑨ 疾患別の現在歯の状況

疾患別で現在歯の状況に差はなかった。



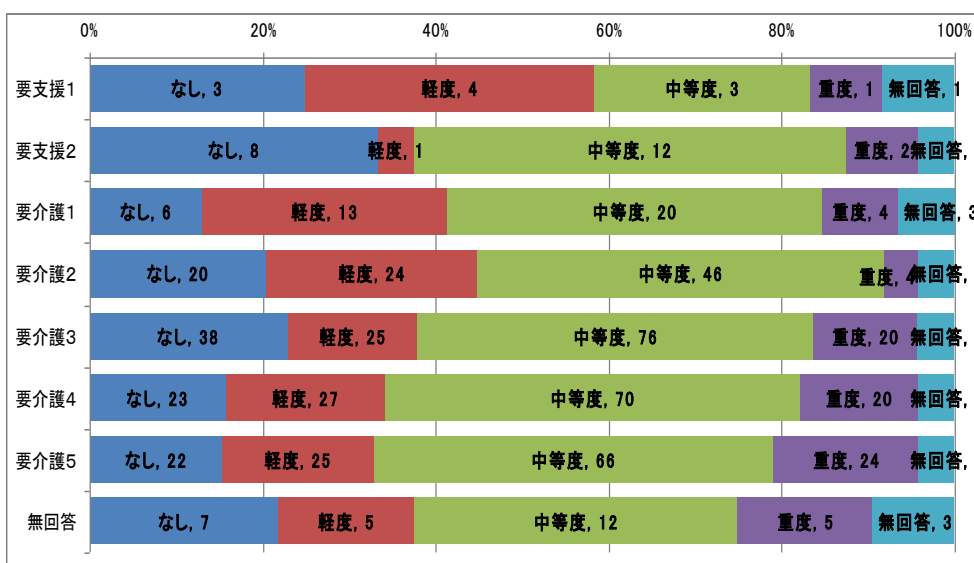
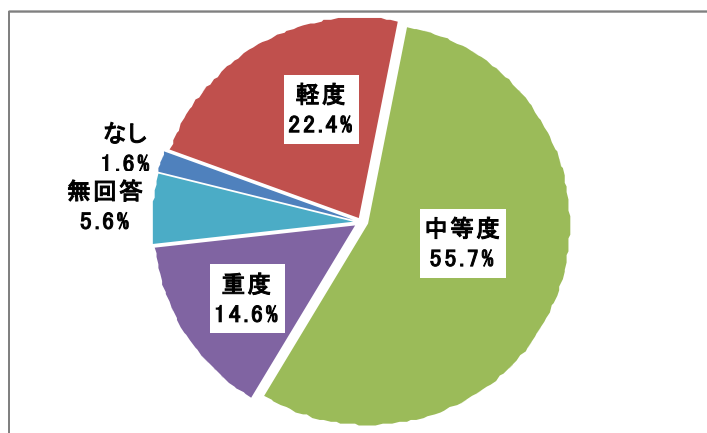
3、歯周病について

① 歯周病の状況

軽度 22.4% 中等度 55.7% 重度 14.6% と殆どの方が何らかの歯周病に罹患している。

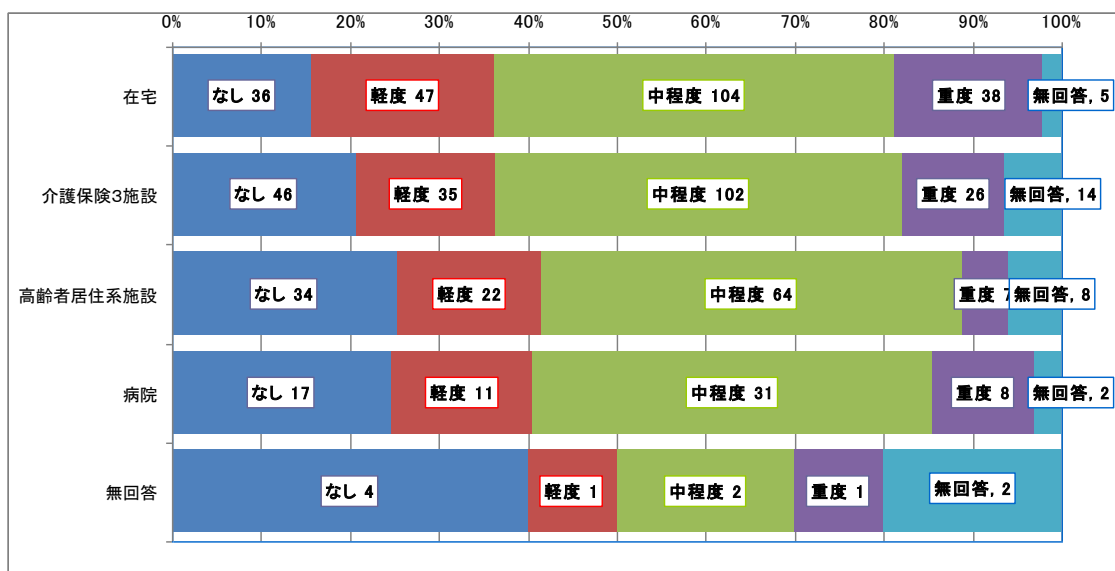
② 要介護度別

要介護3以上では歯周病も重度化している



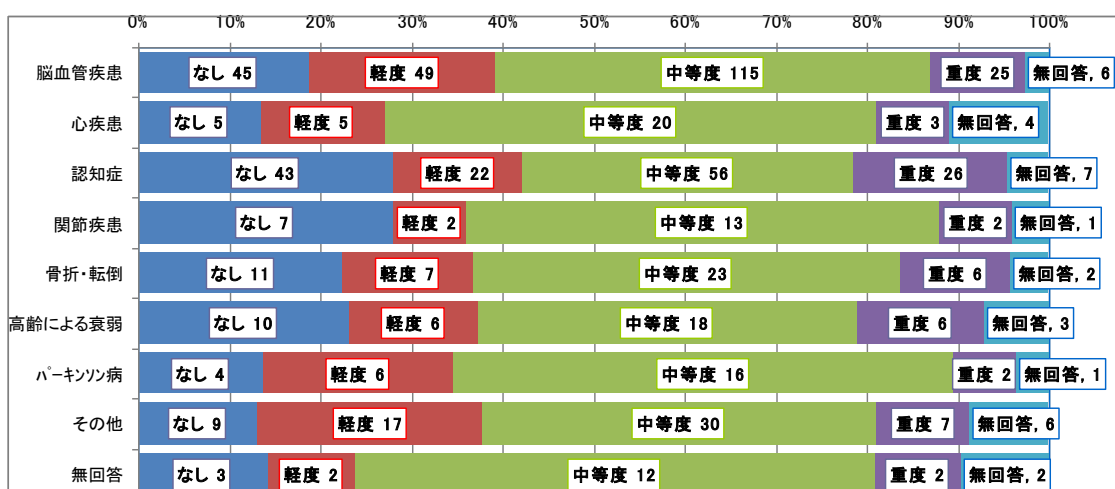
③ 居住別の歯周病の罹患状況

特に大きな違いは認められなかった。



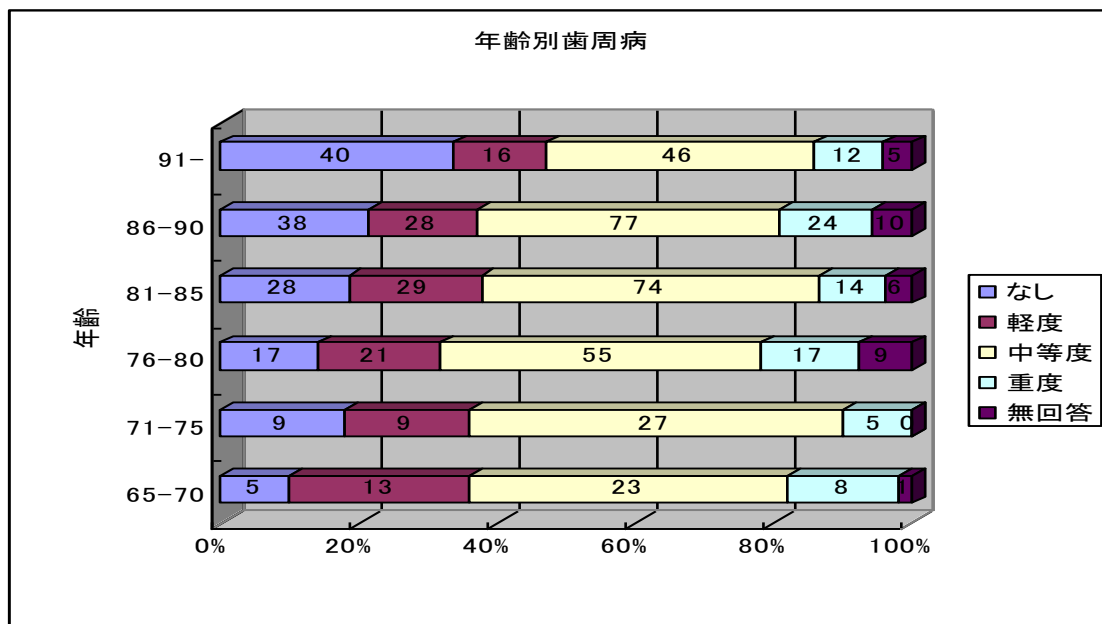
④ 疾患別歯周病罹患状況

疾患別では歯周病の状況に大きな差はなかった。



⑤年齢別の歯周病罹患状況

年齢による歯周病の罹患率に差はなかった。

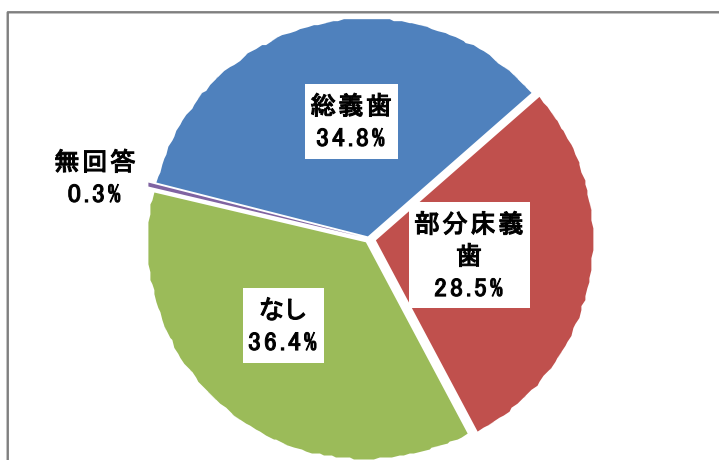


4、義歯の状況

① 上顎義歯の使用状況

総義歯は34.8%と多いが、義歯なしも36.4%と多かった。

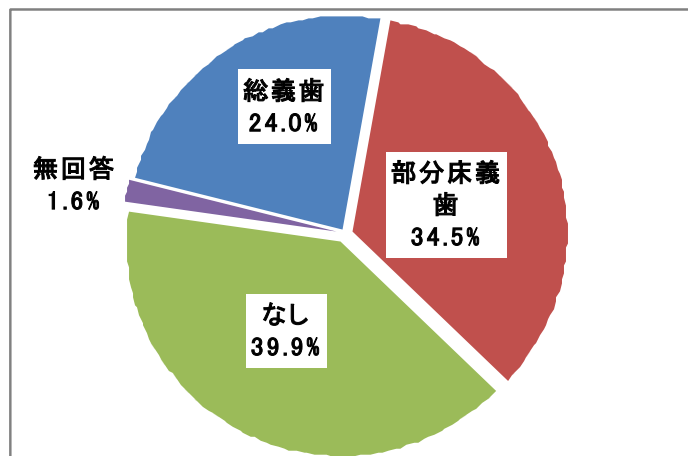
総義歯と部分床義歯を合わせると422人が使用。



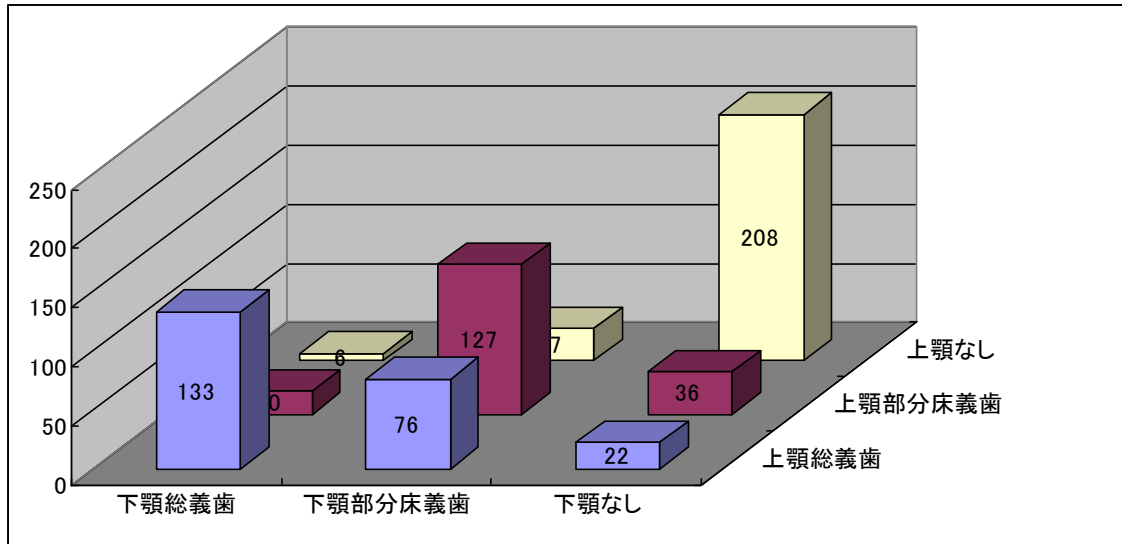
② 下顎義歯の使用状況

義歯なしが最も多く39.9%であった。総義歯は24.0%と上顎に比較し少ない。

総義歯と部分床義歯を合わせると390人が使用。

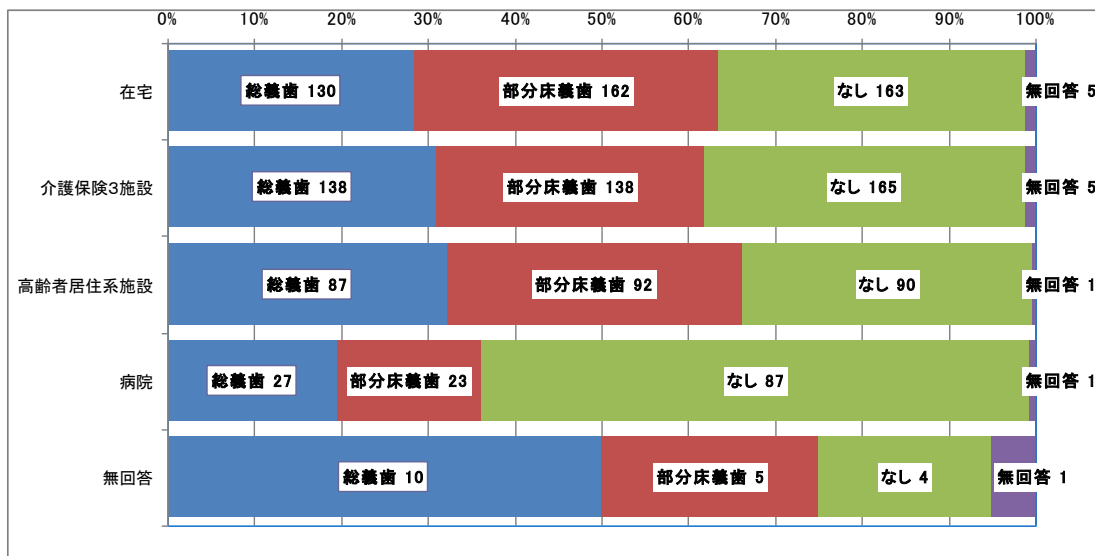


※上下共義歯なしが 208 人と最も多かった。次いで上下総義歯が 133 人であった。

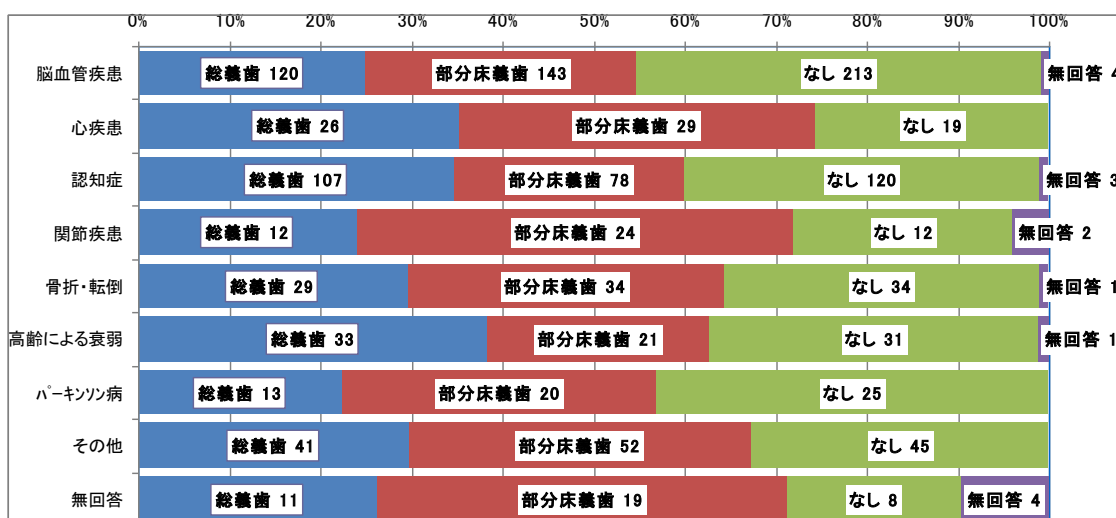


③ 居住別の義歯の状況

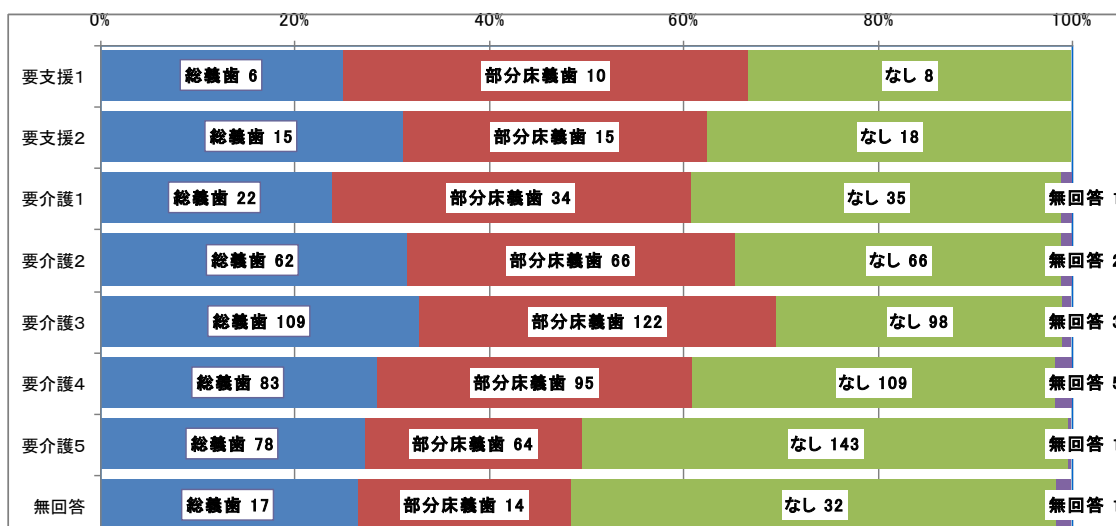
病院での義歯使用が少なく、入院すると義歯を外してしまうことが多いと考えられる。



④ 疾患別の義歯の状況



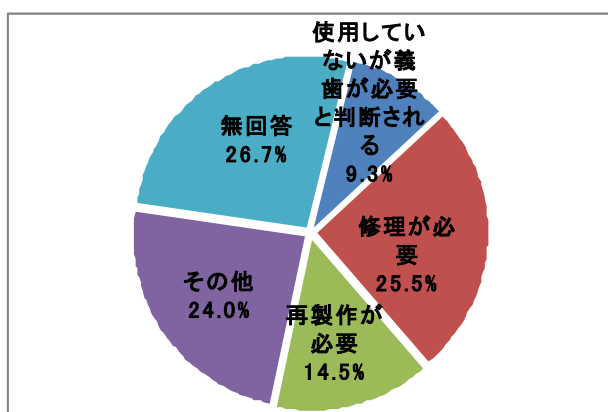
⑤ 要介護度別



疾患別では差はなかった。要介護度別では要介護5で義歯なしが多かった。必要でも使用していないケースが多いと考えられる。

⑥ 義歯の問題点

使用していないが義歯が必要と判断されるものは9.3%・62人と多くないが、修理170人再製作97人が必要で40%であった。義歯の問題があるものは合計329人であった。



5、インプラント

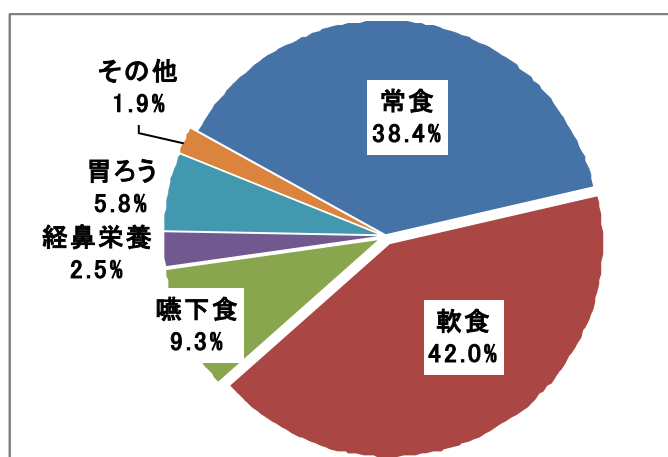
- ① インプラントの有無：まだインプラントがある要介護者は少なかったが今後増加が予想される。

	件数
あり	1
なし	660
無回答	6
計	667

6、食事の状況

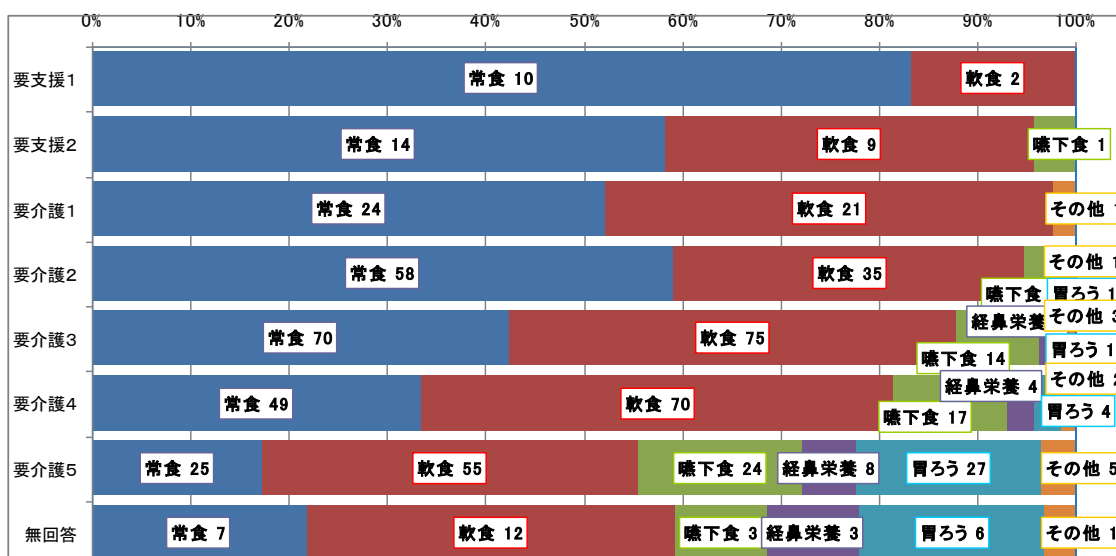
① 食形態

常食が 38.4%軟食が 42%と多く、嚥下食は 9.3%と比較的少なかった。胃瘻は 5.8%経鼻栄養は 2.5%と胃瘻の方が多く、約 17 人に 1 人程度いる。



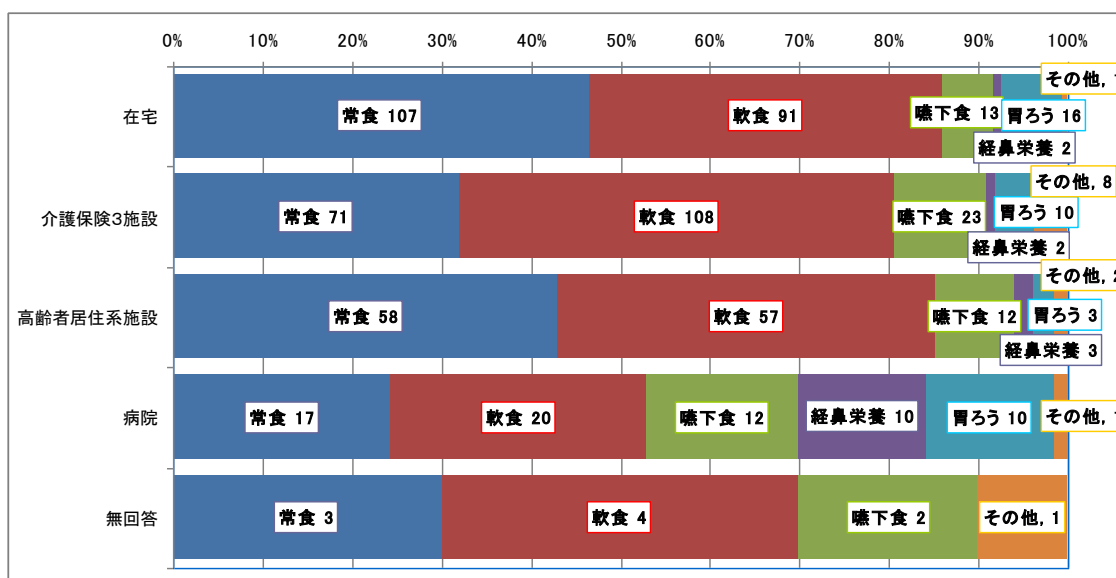
② 要介護度別食形態

要支援1から要介護2までは常食が最も多い。要介護3以降は軟食が多くなり、嚥下食も徐々に多くなる。要介護5では軟食に次いで胃瘻が2番めに多くなっている。



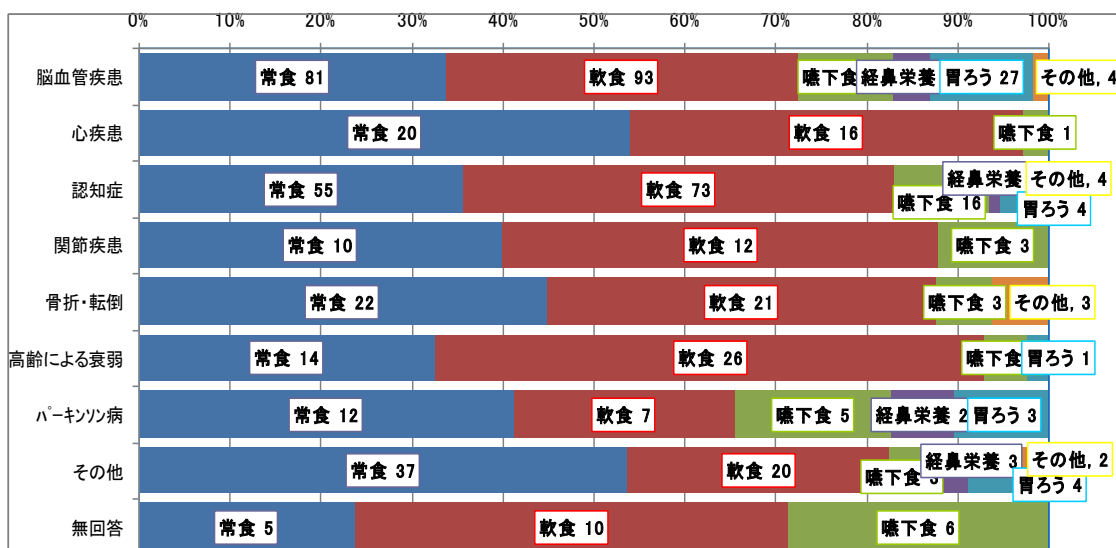
③ 居住別食形態

高齢者居住系施設や在宅で常食が多くなっている。病院では嚥下食以下が多くなっており経鼻栄養や胃瘻も多い。

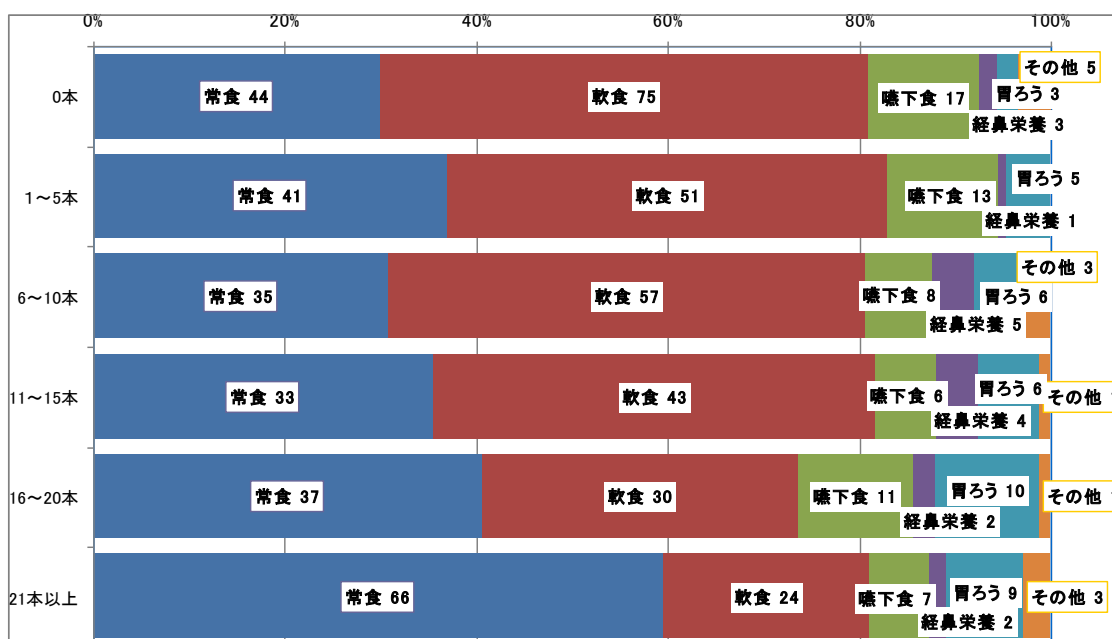


④ 疾患別食形態

脳血管疾患・認知症・高齢による衰弱で常食が少なく、脳血管疾患・認知症・パーキンソン病で嚥下食以下の割合がやや多くなっている。

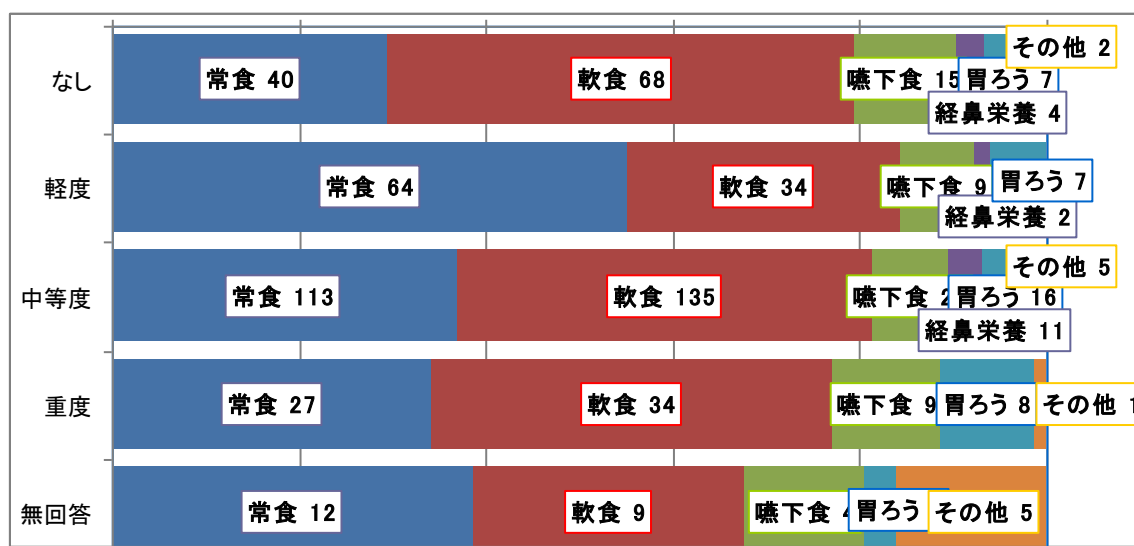


⑤ 現在歯数と食形態



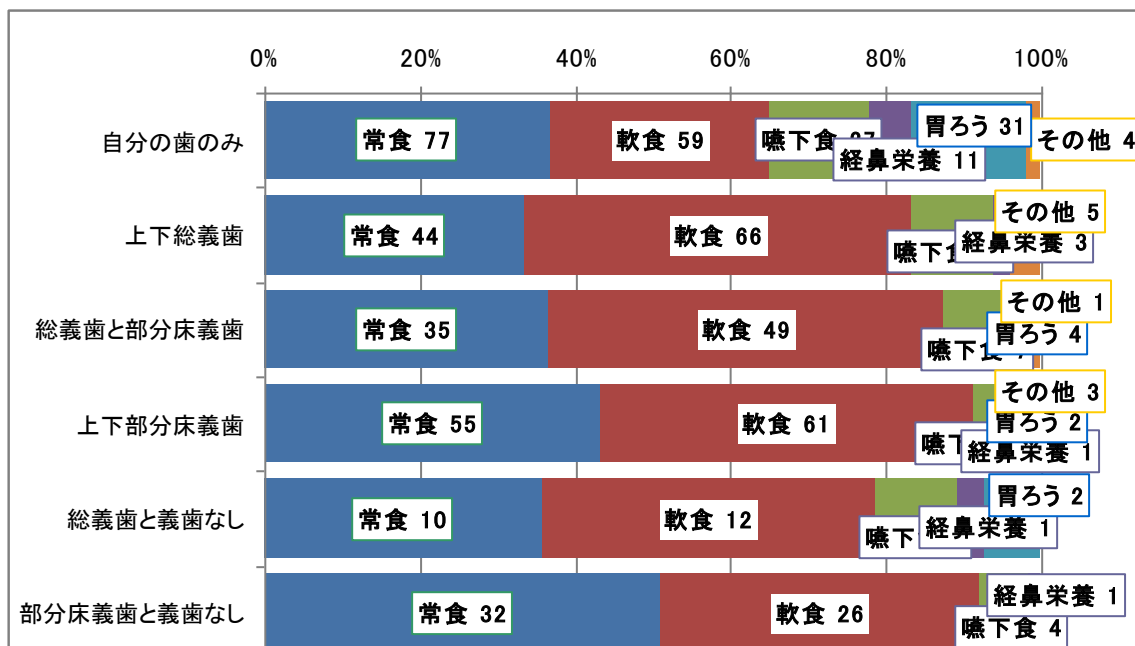
現在歯が多くなるにしたがい、常食が多くなる傾向にある。嚥下食以下では歯数に関係ないと考えられる。

⑥ 歯周病と食形態



歯周病の状態と食形態には大きな差はなかったが、軽度の人では常食が多い。

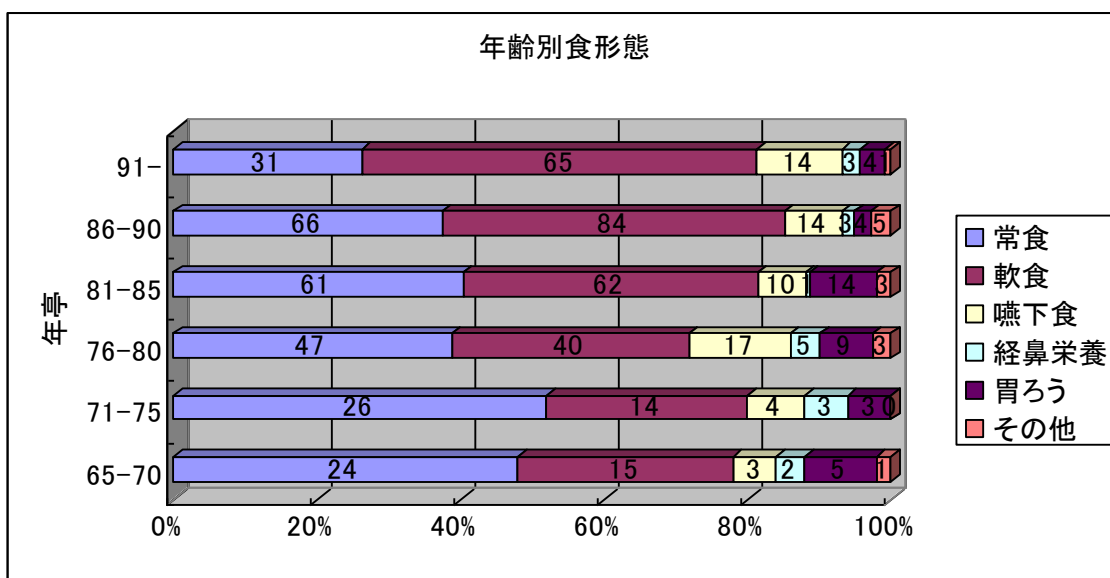
⑥ 義歯と食形態



義歯による食形態に差はなく、摂食嚥下機能による差が大きいと考えられる。

⑧ 年齢別食形態

嚥下食以下については年齢による差はないが、高齢になるにしたがい軟食が多くなる。



【考察とまとめ】

歯科医療の進歩や国民に口腔衛生意識の向上に伴って、超高齢社会の中であっても要介護高齢者の口腔内状態は改善されてきていると言われ、今後の歯科医療の目標は口腔機能の改善や向上に重点が置かれている。しかし 8020 運動の成果で確かに高齢者の現在歯数は多くなっているが、要介護状態になり口腔清掃が十分にできなくなると、う蝕や歯周病が進行しているのではないかとの疑問もある。そこで今回、全国の保険医協会・医会に依頼し要介護高齢者の口腔実態調査を実施した。

全国から 667 名の調査票が得られた。男女比は 1:1.84 と女性が 2 倍近く多かった。基礎疾患では脳血管疾患と認知症が多く、この 2 疾患で約 6 割を占めた。また要介護 3・4・5 で約 7 割を占めた。

口腔内の状態は、無歯顎者は 18%の 118 人であり、一方 21 歯以上現存している人は 140 人いた。平均現在歯数は 12.4 本であった（有歯顎者では 14.6 本）。そのうち 1 人平均健全歯数は 3.8 本、処置歯は 5.2 本であった。C4（残根状態の歯）は 1 人平均 1.6 本であり、未処置歯が合計 3.4 本であった。つまり残っている歯の約 3 割がう蝕であった。C1（歯の表面の初期のう蝕）保有者は 80 人 C2（う蝕が象牙質に進行したもの）保有者は 172 人 C3（う蝕が歯髄に達したもの）保有者は 123 人 C4 は保有者 283 人と C4 保有者が多く全対象者の 35.7%のものに C4 があった（有歯顎者では 51.5%）。またう蝕の割合は年齢や要介護による違いは必ずしも無かった。

歯周病の状態は中等度以上の歯周病が 70.3%と多くのものが歯周病に罹患している。要介護 3 以上では歯周病も重度化している。

義歯は約 6 割のものが使用しており、そのうち約 8 割に問題があった。

食事摂取状況であるが、経鼻栄養 2.5%胃瘻 5.8%であり 90%以上は経口摂取していた。要支援 1 から要介護 2 までは常食が最も多い。要介護 3 以降は軟食が多くなり、嚥下食も徐々に多くなる。要介護 5 では軟食に次いで胃瘻が 2 番めに多くなっている。

今回の調査は初診時または再初診時の調査であり、治療前の状況であることを考慮しなければならぬが、現在歯が多く残り、そのうち約 3 割にう蝕があり、特に残根が多かった。歯周病も中等度以上であり義歯も問題があるものが多かった。このように要介護者の口腔内はまだ治療が必要な状況である。臼歯部での咬合が治療により回復されると低栄養や認知機能が改善されるという報告もある。また義歯を装着したり PAP（舌接触補助床）を装着することにより舌圧が改善し摂食嚥下機能の改善にも繋がる。口腔機能低下による誤嚥性肺炎を繰り返す者も少なからずおり、口腔ケアや口腔機能リハビリが必要である一方、在宅要介護高齢者の訪問歯科診療での要望の多くは義歯やう蝕に関するものである。実際に要介護高齢者に対し訪問診療をしていると VE 検査（嚥下内視鏡）や摂食嚥下リハビリテーションの要望はまだまだ少ない。したがって口腔の機能的な回復改善も今後重要になっていくと考えられるが、そうした対応とともに口腔の形態的な回復改善もまだまだ必要だと考えられる。

訪問歯科診療の実施率は 18%程度と言われている。在宅や施設において口腔疾患の治療、

口腔ケア、口腔機能改善などさまざまな需要があると思われる。医科歯科連携、ST（言語聴覚士）などとの多職種連携のもと訪問歯科診療が今後さらに実施されるように期待したい。今回の調査がその一助になれば幸いである。

【参考】自由意見欄

- 1 義歯問題や抜歯だけでなく、C2の必要な患者を多岐にわたり多いと感じている。また、衛生上による口腔ケアがとても必要と感じるが、衛生士不足により出来ていないのが現状です。
- 2 良好な方と極端に悪い方と2つに分かれる。
- 3 残存歯の有無に関係なく介護者のサポートが重要。サポートの程度で口腔内も変化する。
- 4 殆ど老健施設入所の患者さんで高齢な方が多いのですが、無歯顎か又は残根あるものの無歯顎に近い方が多いです。前の病院で入院中口腔ケアがされず残根状態になり、主訴として咀嚼不全の訴えがあり歯科が介入する事が多いと感じます。
- 5 欠損はすくなくない。セルフケア出来ている人はほとんどいない。認知症の人が多く、意志の疎通も出来ない人も多い
- 6 残根状態で放置されているケースがあまりに多い。根面カリエスがかなり多い。また食形態において常食が可能と思われるのに軟食、嚥下食が提供されている。
- 7 症状がでるまで口腔内をフォローしている人がいない
- 8 嚥下障害は口腔をケアをしても進行する時はしてしまうか、う蝕や歯周病の進行は通院している患者さんより分からないかもしれない。認知の中でも拒否というか暴力的な人、暴言をはく人の割合が増えている。
- 9 意識レベルの高低により歯科治療の要求度が異なる。意識レベルが低く、かつ要介護度が高く、残存歯数の多い人は口腔が汚れ未処理歯が多い。
- 10 残根が多い。歯周病も、義歯を入れていない方も
- 11 残存歯が多くなっている。う蝕も多い。摂食嚥下障害も多くなっている。
- 12 職員の指導が良いため重度の歯周病は見られない。
- 14 施設の従業員が少なくて口腔ケアができていない
- 15 口腔機能の低下がみられ、概ね含嗽が苦手である
- 16 当院通院不可になり往診に移行した患者は概ね口腔状態は良好（対応が早期でもあり）。介護施設、医科からの依頼は痛みの訴えによるため口腔状態はかなり厳しい。
- 17 インプラント埋入しているがメンテナンスのための通院ができなくなっている患者様がここ数年散見されるようになってきました。中には要撤去のものもありますが、訪問診療においては手が出せない状況です。
- 18 口腔清掃状態を良好に保つのが難しいというのを痛感しました。同時に治療が必要な方々もまだまだいると思いました。
- 19 口腔内の清掃状態が悪い、乾燥している、口臭がある。

- 20 週に1回の治療でも歯周病治療を継続すると口腔機能の向上につながる。
- 21 口腔清掃状態不良で多量の歯垢付着している場合が多いです。要欠損補綴や要修理の義歯が放置され摂食機能の低下があります。
- 22 ロングのブリッジやインプラントをされている介護の必要な方のケアに大変です。補綴が外れかかったり痛んでも処置が難しいことが多いです。
- 23 要介護者のう蝕、歯周病は多い。私の行っている訪問診療は口腔ケアは良好であった。
- 24 病院等管理下におかれた患者は比較的清潔であるが、居宅の場合は口腔状態は不十分な状態である。
- 25 介助者の口腔内衛生管理への関心と管理方法技術によって個人差が極めて大きいと考えられる。
- 26 身内及び家族さんの対応の違いが往診の数を決定づける要因の1つであること。口腔ケア、歯科往診への認知はいまだ偏りを感じる。
- 27 口腔の状態が身体の状態に関わる事について認識の差が大きい。食事摂取についても食形態や摂取方法が患者さんに合っていないケースが多い。
- 28 正常な人はほとんどいない。ブラッシングができない人がほとんど。口腔ケア認識ゼロ。
- 29 口腔内の初診で対応が必要です。
- 30 居宅においてはできるだけ衛生士が介護者に口腔ケアの大切さとケアの仕方を伝える事が大切と感じます。老健施設においては口腔機能を体制加算のシステムも広がり、スタッフも同じ目標でケアすることで肺炎の入院も少なくなり、舌体操パタカラなどにより80代、90代の方々も元気に過ごされています。又週1回歯科医師、歯科衛生士が入ることでスタッフのモチベーションが続いていると思います。
- 31 口腔清掃状態が悪い方が多い印象です。全身疾患、服薬状況も様々ですので、それを考えてのケア、治療方針を考えていくことが大切であると思っております。
- 32 80歳代を超えると根面カリエスが多発して治療が追いつかない。
- 33 清掃不良が多い。義歯が合っていないまま使用している人が多い。
- 34 口腔内の状態が悪くなってから依頼のあるケースが多く、介入しているにもかかわらず崩壊していくケースが多い
- 35 施設入居者の義歯は清掃状態良好。在宅の方は食槽が残っており清掃不十分。
- 36 口腔状態が向上することはもちろんの事、ADLの向上にも繋がる。
施設入所と在宅を比べるとやはり家族介護における口腔健康に難しいように感じます。機能訓練に関しても家族に指導しても維持されないようです。